

小野寺 久幸 — 仏像修理一筋に歩んだ人生 —



小野寺 久幸
(小野寺家提供)

(このままここにいては、自分の夢はかなえられない。)

そう思った久幸は、二十歳の時、家族の反対を押し切って、それぞれの夢を抱いて親友と東京に行きました。ところが、現実にはあまくなかったのです。生活の貧しさや知り合いもないさびしさは想像以上で、がまんできなくなつた親友はふるさとに帰ってしまいました。それでも久幸は夢をあきらめられず、一人でがんばろうとしました。「あのお、こいつは、なじよしたらいいんだべ。おしえてくだはりせ（これはどうしたらよいか、教えてください）。」「ははは、今なんて言ったのかな。なまり（方言）が強すぎて、意味が分からないよ。」東京の人に方言を笑われ、言葉が通じないのです。久幸は泣きたくなり、だれとも話をしなくなっていきました。それでもなお、歯を食いしばって一人東京に残りました。

日雇いの仕事をしながら、美術を学ぶ道を探し続ける生活が二年ほど続きました。ある時、久幸の一人気持を知った人が仏像修理をしている職人を紹介してくれました。その人から「仏像修理の仕事を手伝ってほしい。」と頼まれ、久幸は喜んで引き受けました。しかし、仏像修理について何の知識や技術もありません。少しずつ教えてもらい、時にはどなられながらの作業が続きましたが、一日も早く仕事を覚えるよう必死に努力しました。少しでも知識を得ようと、仏像に関する本を夢中になって読んでいるうちに、気がつくとも朝になっていたこともたびたび

でした。また、忙しい中でひまを見つけては、寺社をめぐるって、独学で仏像の勉強をしました。

仏像についての知識が深まってくると、仏像修理の難しさだけでなくおもしろさも感じられるようになりました。それだけでなく、木で作られた仏像は壊れたり腐ったりしやすく、このままでは多くが失われてしまうことも分かりました。この仕事のやりがいや大切さを知った久幸は、

(私は、仏像修理の仕事を一生続けて、大切な文化財を守っていこう。)

そう心に決め、仕事に打ちこみました。そして、だれもが一目置くほどの優れた仏像修理の技術や深い知識を身につけました。そして四十六歳の時、その実力が認められて、美術院国宝修理所の所長に抜てきされたのです。

昭和六十三（一九八八）年、久幸は、奈良の東大寺南大門に立つ国宝金剛力士像（仁王像）の解体修理を頼まれました。鎌倉時代に天才仏師運慶、快慶らによって作られた仁王像は、高さ約八・四メートルもある日本最大級の木造彫刻です。あまりに大きすぎて、作られて八百年の間、一度も解体修理がされておらず、傷みがひどくてすぐにも修理が必要な状態でした。

解体前に、久幸は二体の仁王像を見上げてみました。門からちようど三歩のところまで立ち止まると、二体の視線が自分とぴたりと合い、鋭い目でにらんでくるのです。ものすごい迫力で、見る者を圧倒する力強さでした。久幸はその視線を受けながら、大きく身震いしました。

平成元（一九八九）年六月。久幸の指揮の下、総勢三十人のチームが、誰も経験したことのない難しい解体修理にいどみはじめま

国民学校：
戦時中の義務教育を行う学校の名称。初等教育六年、中等教育二年。

日雇い：
一日このやくそく働くこと。

一途：
ただ一つのことを追い求め、他のことを考えない様子。

独学：
学校に行ったり先生に習ったりしないで、一人で勉強すること。

一目置く：
自分よりすぐれた人とみとめて尊敬し、一歩下がって接する。

美術院 国宝修理所：
国や地方自治体などの依頼を受けて、国宝、重要文化財及び古文化財の修理を行ったり、修理技師を養成したりして、日本の文化財保存事業を実施している。

抜てき：
大勢の中から能力のある人を選び出して重要な役目につけること。

国宝 東大寺南大門 金剛力士像：
「金剛力士」とは、「金剛杵（こんごうしよ）」、「硬いダイヤモンド」を砕ける武器を手にした仏教の守り神のこと。阿形と吽形の二体でペアになっており、「仁王像」とも呼ばれる。鎌倉時代に運慶が、快慶ら十八人の職人を率いて六十九日で作上げたといわれている。



東大寺南大門 (写真提供：奈良市観光協会)



東大寺南大門金剛力士像(左：阿形像 右：吽形像)
(写真：公益財団法人美術院所蔵)

した。鎌倉時代に作ったときの書物（設計書）などはなく、手探りで解体してみると部品は一体で約三千もあったのです。国宝である仁王像には、傷一つつけることも許されません。一つ一つを修理して元どりの姿にもどすことは、想像以上に大変なことでした。

責任者である久幸の仕事は、大勢の人達をまとめ、修理方法や手順を決め、必要な材料などをそろえ、修理の進み具合を見て必要な指示を出すことでした。すべての責任が、久幸の肩にかかっていたのです。仏像修理は、できるだけ作られた当時の材料を使って、当時の作り方に近い形で直す必要があります。きれいにするのはなく、今あるものをできるだけ残すことが、歴史を保存することになるからです。

ある時、仁王像の右手の薬指の欠けた部分を修理しようとする、なんと木目のうず巻き模様が指もんに見えるように生かされていたのです。

「これはすごい。さすが運慶ですね。」

「本当だな。でも、困った。これと同じ種類の木は、もう当時の産地には生えていないんだ。」

「どうしたらいいでしょうか。」

「なんとしても、同じような木目をもつ木を探し出すしかない。あきらめなな。」

作業現場には、修理のために全国から何百種類という木材が集められていました。地形や気候を調べ、より近い産地を探し回り、その一本一本の特性や木目を見ながら、修理に使える木材を必死に探し出したのです。そして、たくさん時間と労力をついやして、ようやくぴったりの木材を見つけ出し、みごとに指を修理しました。

また、八百年間部品をつないでいたくぎ類も、新しいものと交換することが必要でした。ところが、当時の技術は現代には伝わっていません。探してみると、同じ製法を受けつぐ刀鍛冶は、日本にたった一人しかいないことが分かりました。久幸は、広島に住む刀鍛冶の家を探しあて、八百年前と同じくぎを作ってくれるよう頭を下げて頼みこみました。

このように、作業は多くの困難や苦勞の連続で、頭をかかえることもしばしばでした。しかし、久幸はどんな時も強い気持ちであきらめずに取り組み、皆を引っばりました。そこには、運慶たちの技術のすばらしさに触れて自分の技術を高めたいという、職人としての強い願いもあったのです。だから、久幸はいつもこう思っていました。

（鎌倉時代の仏師たちの知恵と技術は、本当にすごい。私も負けられないぞ。）

解体修理から、五年もの年月が流れました。久幸たちが、技術と知識のすべてをこめて修理した仁王像は、無事に元の場所に戻されました。久幸は最後の確認をするために、解体修理前にしたように、門から三步のところまで立ち止まり、仁王像を見上げました。すると、二体の視線は、ぴたりと久幸をとらえて、にらみつけてきたのです。

（運慶さん、快慶さん、やり遂げましたよ……。）

平成五（一九九三）年、十一月、仁王像の落慶法要（完成を祝う式典）が、東大寺で盛大に行われました。その中で、人々の注目は「大仏師」の称号の授与式に集まりました。大仏師とは、もともとは奈良時代に仏師たちをしたがえて大規模な仏像制作に当たった責任者に与えられたもので、仁王像を作った運慶と快慶も授与された名誉ある称号です。久幸への授与は、東大寺としては江戸時代以来二百六十年ぶりという快挙だったのです。多くの人々の拍手と歓声の中、大仏師の称号を受けた久幸の顔は、輝いていました。

久幸は、四十五年にわたって三千体以上の仏像を修理し、日本の仏教美術の保存に努めるとともに、多くの優れた修理技師の育成にも力をつくしたのです。ふるさと気仙沼市にある峰仙寺（白雲山仏国峰仙禅寺）の山門には、久幸の彫った見事な仁王像が安置されており、今も訪れる人を迎えてくれます。



峰仙寺山門仁王像
(気仙沼市)

小野寺 久幸

小野寺 久幸は、昭和四（一九二九）年、宮城県本吉郡小泉村（現在の気仙沼市）に生まれた。幼い頃から美術に興味をもち、上京して仏像修理師となった。奈良東大寺の仁王像の修理を見事に成し遂げて、「大仏師」の称号を授かった。生涯に国宝をはじめ三千体以上の仏像の保存修理を手がけた。

刀鍛冶：
金属を熱して打ち
きたえ、刀などを
つくる職人。
頭をかかえる：
どうしていいか分
からずじつと考え
こむ様子。

快挙：
他からほめられる
ようなすばらしい
こと。
安置：
大切にすえ置くこ
と。